

〔論文〕

関宿久世家「教倫館」と儒官「亀田綾瀬と亀田鶯谷」

松丸明弘

はじめに

藩校とは、藩学や藩学校などと呼ばれ、近世以降、明治四(一八七二)年の廃藩置県に至るまで、藩士の子弟を対象に設立された教育機関である。農工商である庶民を広く対象にしたものが手習塾(手習所、寺子屋)であるとするれば、武士の子弟を対象にしたものが藩校である。明治二(一八六九)年当時の総藩数二七六藩の内、資料を欠くため藩校の存在が明らかでない二一藩と、明治時代にはいつのちに設けた三六藩との、計五七藩を除いた二一九藩が慶応三(一八六七)年までに藩校を創設している。特に関宿を含む下総国では、不明を含めて九校の存在が確認されている。<sup>①</sup>

千葉県東葛飾地域の近世教育史の研究は、民衆教育史の分野で着実な成果をみることができている。民衆教育の教育施設である手習塾(寺子屋)の存在を確定できるものに筆子塚(筆子塔)がある。この師匠の顕彰碑を明らかにする作業が、野田市、流山市などで行われている。<sup>②</sup>

本稿は、東葛飾地域唯一の藩校であった関宿久世家の「教倫館」について明らかにしようとするものである。現在の野田市関宿の一带は、近世から現代にわたって江戸川と利根川の両河川の流路変更の大規模工事にもない、地形そのものが大きく変貌を遂げた地域である。<sup>③</sup>そのためか、史料が散逸してしまうことが多く、教倫館関係の史料は、ほとんど残っていない。

関宿の郷土史家として著名な人物として奥原謹爾がいる。奥原謹爾は、野田、二川、関宿久世小学校訓導より関宿久世小学校校長として関宿の学校教育に尽力され、その後、助役、町長を歴任し、関宿町の教育長として関宿の発展に尽力した人物である。明治二十五(一八九二)年の生まれである。奥原は「関宿雑記」<sup>④</sup>、そして「関宿志」<sup>⑤</sup>という著作を残している。

また、元関宿小学校校長であり、千葉県立関宿城博物館研究員の林保氏も「関宿藩校 教倫館」<sup>⑥</sup>と題した論考をまとめておられる。

なお、これら論考の基本史料となったものは、『日本教育史資料』<sup>⑦</sup>や『千葉県教育史』<sup>⑧</sup>であり、これらの史料をもう一度検証しながらまとめていくことにする。

## 一 久世家支配と教倫館の創設

関宿には、譜代大名を代々藩主に持つ関宿藩があり、ここに教倫館という藩校があったことが知られている。関宿は、江戸水防の要衝として、また軍事的にも重要な拠点であったため、譜代大名の居城が置かれた。特に久世氏支配で知られ、寛文九（二六六九）年に久世廣之が入封し、その後牧野成貞に支配が代わり、宝永二（二七〇五）年に再び久世重之が三河吉田から二度目となる入封をして以来、明治の廃藩まで久世氏の治世が続いてきた。歴代藩主は、久世重之のあと、暉之、廣明、廣誉、廣運、廣周、廣文、廣業と続く。久世家は九代一七〇余年間にわたり関宿城主であったことになる。また歴代藩主のなかでは重之、廣明、廣周が老中になるなど徳川譜代の臣として重きをなしている。七代の廣周は、嘉永四（二八五二）年に老中になったが、安政五（一八五八）年、大老の井伊直弼の独断専行に反対して老中職を免ぜられている。しかし、万延元（一八六〇）年直弼の没後再び老中に迎えられて、安藤信正とともに和宮降嫁を実現させた。廣周らはこれにより朝暮關係を安定させようとしたが、意に反して文久二（一八六二）年安藤信正とともに罷免され、蟄居を命じられた。嫡子廣文が幼少にして跡を継いだ。藩政の混乱を招くことになった。

教倫館は藩主廣運の代の文政六（一八二三）年十一月十五日に漢学を主として教授する藩校として設立された。廣運以来、連綿と続いたが、明治四年に廢藩となり、明治五年にすべてを印旛県に引き渡し廢校となっている。従って、その設立は近世後期ということになる。全国の藩校と比較して、特に寛政、文政期（一七八九、一八二九）の間に設立したものが八七校で近世では最も多く、教倫館もこの中に含まれている。このことから教倫館も商品経済の発達にともなう人材育成が急務となった近世後期に発展した教育機関と位置づけられることになる。人材育成というのは藩政の支えとなる

官僚の育成ということになるか。

## 二 亀田鵬齋・綾瀬・鶯谷と教倫館

創立当時の教倫館関係職員は、取締役一名、見回り役一名、儒者一名、頭取二、三名、世話役四、五名、助教若干名であったが、この中で教倫館専任の者は儒者一名であり、他の者は兼任であったとされている。

『千葉県教育史』に「亀田綾瀬父子ヲ聘イテ藩士ノ教育ニ任ジ」とあり、亀田家により教倫館の教授がなされていることがわかる。亀田鵬齋の跡を継いで亀田綾瀬、その跡を継いで亀田鶯谷となる。以下、彼らの略歴を記す。

亀田鵬齋、鵬齋と書いて「ぼうさい」と読む。鵬齋は、江戸時代後期の儒学者で宝暦二（一七五二）年十月四日江戸神田生まれ。幼名は弥吉、名は長興、通称は文左衛門、鵬齋または善身堂と号している。父の万右衛門は日本橋横山町の長門屋という鼈甲商の通い番頭をしていた。群馬県甘楽郡千代田町の出身。井上金峨に学び、山本北山と親しく、江戸学界の五鬼に数えられた。二十三歳の頃に赤坂の山王社、日枝神社の近くに塾を開いている。折衷学派と呼ばれ、江戸中期の儒学一派である。学問的志向を朱子学ほどに限定せず、漢唐の訓詁学を取り入れたことに特徴がある。林鳳岡の門から出でて、井上金峨に至り隆盛を迎えたもので、亀田鵬齋はこの井上金峨に師事した。（図1参照）

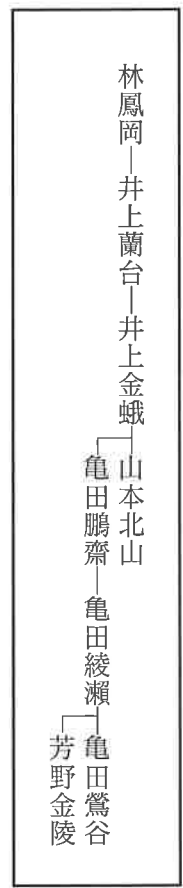
やがて亀田鵬齋らは、朱子学を正学としてその他の学派は異端として禁止した寛政異学の禁で弾圧を受ける。仕官の道は途絶え生活にも困窮することになった。享和元（一八〇一）年に下谷金杉中村に移り、尾形光琳を慕い、琳派の画家として知られる酒井抱一や、画家の谷文晁、狂歌師の太田南畝などと親交を結び、文人生活に入

った。自由の身となり、請われるままに各地に赴いて、詩や碑文を残している。信州へも出向き、良寛とも交友を持ったことでも知られている。文化十二(一八一五)年には、千住の飛脚宿の主人、中屋六右衛門の還暦を祝い、「千住の酒合戦」といわれる大酒宴が開かれたが、この催しに参加している。酒にひたり、詩と書の特異な風格で評判になっている<sup>19)</sup>。

この亀田鵬齋が教倫館に来たのが、いつだったのか。文化四(一八〇七)年に関宿を訪ねている。その後、鵬齋は文政九(一八二六)年三月九日に七十五歳で死去しており、東京都台東区今戸の称福寺西側の墓地に眠っている。教倫館創設が文政六年十一月であることから、死去まで二年あまりの歳月しかないことになる。七十二歳の亀田鵬齋の肖像画が残っている<sup>20)</sup>。文政六年の四月に柳橋の万八楼で書画会が開かれている。鵬齋は三年來の中風で、左半身不随の身ながら、なおよく書の要求に応えて、筆を執っていたとしているが、酒好きが災いした中風という病気の上に高齢で、果たして教倫館で教鞭を執れたのであろうか。このような状況から考えて、おそらく最初の関宿久世家の儒官は鵬齋の子の綾瀬であろう。従って『千葉県教育史』に述べられている所の「亀田父子」とは、鵬齋と綾瀬ではなく、綾瀬とその子鶯谷ということになる。

亀田鵬齋の子の綾瀬は、安永七(一七七八)年に誕生している。綾瀬と書いて「りょうらい」と読み、名は長梓、通称は、三蔵、綾瀬または学経堂と号している。十五歳にして初めて経書を旗本久永氏の邸に講じ、以後、父に代わって諸家の講演に臨んだという。文化の初年に浅草蔵前に私塾を開き、のちに本材木町に移った。その後、文政の初めに教倫館の儒官となったと言われる。教倫館での儒官の仕事ののち箱崎、駿河台に移り、晩年は深川に隠棲し、嘉永六(一八五三)年四月十四日に七十六歳で死去している。この綾瀬が教倫館の儒官として文政六年に関宿に来たとすれば四十一歳ということになる。

図1 折衷学派と亀田家関係図



綾瀬の子、亀田鶯谷。鶯谷と書いて「おうこく」と読む。文化四年五月三日、下総国結城郡八千代村東落田の生まれ。名を毅、号を盤谷と言ひ、のちに名を長保、字を申之、号を鶯谷、学孔堂とも言った。十九歳の時に江戸に出て、綾瀬に学び、見込まれて養女の縫に配せられて養子となり、師家を継いだ。つまり、綾瀬の実子ではないことになる。しかし、その学問は他の門人たちより抜きんでていたものと思われる。綾瀬のあとに関宿候の儒官となる。鶯谷には、尊皇攘夷の思想があつたようである。維新に伴う藩政の紛糾に伴い、一年あまり獄につながれる体験もしている<sup>21)</sup>。

その後、許されてのち東京深川に住み、ついで本所横川に移り、明治十四(一八八二)年八月二日、七十五歳で没した。鵬齋や綾瀬とともに今戸の称福寺に眠っている。

### 三 学則にみる教倫館の教育

教倫館には時代を経て様々な規則が定められてきた。内容はすべて教倫館運営上の基本方針であり、規則であり、生徒心得であり、指導要領に相当するものであろう。藩主の交代時に布達されてきたものと考えられる。「規制」、「会規」など様々な名称が付けられている<sup>22)</sup>。

「規制」「諸会規」と称したものが文政七(一八二四)年十一月に布達されている。これは、藩主が廣運の時である。次に「学範」と

称したものが文政六年十一月に布達されている。これは廣運が定められたものを天保十三（一八四二）年十一月に時の廣周が改めて公にしたものである。次に「学規」と称したものが文久三（一八六三）年九月に布達されている。これは藩主が廣文の時である。さらに「学則」と称したものが明治三（一八七〇）年五月に、「教則」が明治四（一八七一）年五月に布達されている。これは藩主が廣業の時に定められたものである。以上、藩主の代替わりごとに出されたと考えられる六つの史料が教倫館の教育の概要を伝えている。（表1参照）儒官は亀田綾瀬と鶯谷である。これらの規則類について、大筋で概要を捉え、次に差違をみていきたい。

表1 教倫館の規則

名称	布達年月	藩主
規 制	文政7年11月	廣運
諸会規	文政7年11月	廣運
学 範	天保13年11月	廣周
学 規	文久3年9月	廣文
学 則	明治3年5月	廣業
教 則	明治4年5月	廣業

出典 『日本教育史資料』 第一巻

教倫館にはどのような学生が入館し、どのような学習活動が行われていたのだろうか。まず、学生については、

一、藩士の子弟。八歳で入学し、三十歳まで在学可能。

二、藩士の子弟以外でも領内の一般町民の子弟も希望すれば吟味の上、入学が許可。

とあり、武士身分以外に町民の子弟の入学が許可されていたことがわかる。

教授内容については、文学と武術に大きく分け、

文学……漢字を必修とし、算法、筆道、習礼が選択科目。

武術……兵学、槍術、剣術、柔術、弓術、砲術、馬術、遊泳の八科目。

としている。奥原謹爾は武術を教倫館で教えていたとし、林保氏も同様としているが、これを裏付ける史料は、『千葉県教育史』であろう<sup>27</sup>。しかし、漢学については「学範」や「教則」などの諸規則にその教育内容が掲載されているが、武術についての記載はない。教倫館で武術を教えたかどうかについては検討を必要とする。

漢学の教科書は、素読の課程と講義の課程に分かれ、それぞれが表2のように初級から上級にテキストが決められていたようである<sup>28</sup>。

まず、素読という、文章の意義はさておき、まず文字だけを声を出して読むという、漢学の学習の初歩とされる素読の課程では、初級に『孝敬』<sup>29</sup>、『四書』<sup>30</sup>。中級に『五経』<sup>31</sup>、『左氏春秋』<sup>32</sup>、『国語』<sup>33</sup>。上級に『日本政記』<sup>34</sup>、『史記』<sup>35</sup>、『前後漢書』<sup>36</sup>が使用されている。

また、書籍の意味や学説を明らかにする講義の課程では、初級に『国史略』<sup>37</sup>、『十八史略』<sup>38</sup>、『孟子』<sup>39</sup>。中級に『日本外史』<sup>40</sup>、『左氏春秋』<sup>41</sup>、『論語』<sup>42</sup>。上級に『大日本史』<sup>43</sup>、『毛詩』<sup>44</sup>、『尚書』<sup>45</sup>が使用されている。

学習の中心は漢学であり、基本は「四書五経」である。これらのテキストからみる限り、教倫館の講義は他の同時期の先進的な藩校にみられるような商品経済の発達に対応したカリキュラムなどとは言い難く、洋学や兵学など軍事や近代科学の科目は取り入れられて

はいない。しかし、全国の藩校で儒学をカリキュラムから放棄した学校はなかったように、この教倫館でも中心は漢学ということになる。  
 「教則」には素読、表講釈、内講釈、会読、輪講、復読、詩文会の七種の課程があったことが記されている。

表2 教倫館使用テキスト

	初級	中級	上級
素読課程	孝教 四書	五経 左氏春秋 国語	日本政記 史記 前後漢書
講義課程	国史略 十八史略 孟子	日本外史 左氏春秋 論語	大日本史 毛詩 尚書

出典 『日本教育史資料』第一巻

表3 「教則」にみる教育課程

課程	付記事項
素読	毎日朝五つ時より、但し、三日、八日休み
表講釈	四書の内より、毎月朔望（朔日と十五日）八つ時より、但し、藩士出席
内講釈	四書の内より、毎月三日の朝五つ時より、但し、四書素読済出席
会読	経史とりませ、毎月二十七日暮れ六つ時より、但し、教員その他懇望の輩出席
輪講	経史とりませ、毎月四、九の日暮れ六つ時より、但し、教員その他懇望の輩出席
復読	四書五経の内より、毎月六の日暮れ六つ時より、但し、素読生徒の内七、八名ずつ
詩文会	但し、教員その他懇望の輩出席

表2と表3を比較した場合、素読は共通しているが、表2の講義に相当するものには、講釈、会説、輪講などがあり、付記事項から判断すると、表講釈は藩士全員を対象としたもの、内講釈は素読の終了した生徒を対象としたもの、会説・輪講・詩文会は教員や有志を対象としたもの、復読は選抜された生徒を対象としたものであることがわかる。

また、藩主が代わるごとに出されたそれぞれの規則類について見ていくと教倫館の教育内容に若干の変化も見られる。例えば、文政七年十一月発せられた「規制」によれば、漢学については「濂洛四師の説」を中心に学ばせたが、文久三（一八六三）年九月に出された「学規」によれば、「漢唐注疏」を学業の主流としている。そして「宋以下」は取らずとしている。また、詩文は「韓氏一家に限り古詩長篇を専らとす」とある。これは、これは儒官が亀田綾瀬から鶯谷へと交代することから生じる教育内容の変化であると考えられる。その教育の方向性が変化したものと見ることができ。つまり、「学規」を出し、「漢唐注疏」を学業の主流としてのは鶯谷であろう。そして、明治三（一八七〇）年五月に発布された「学則」になると、「漢注・唐疏を本とすべし。但し疑義これあるにおいては、宋以下諸説引用苦しからず」と鶯谷自身の学風にまた変化が見られる。

また、鶯谷の代になると、尊皇思想が色濃くなる。「学規」の第一条には、

一 尊攘之大義ハ公儀屢特命モ有之且尊攘之神業ハ神典ニ顕着シ其精義入神ノ要至聖夫子是ヲ春秋ニ著シテ深切著明ナリ神典聖経相須テ大義之深奥可得而窺矣是ヲ政教百務之大本トスとある。

「尊攘の大儀」あるいは「尊攘の神業」という言葉が登場する。鶯谷に尊攘思想が色濃く出ていることについては、教倫館で使用されたテキストにもその傾向が見られる。例えば、歴史のテキストとして使用されたものが『本朝通鑑』ではなく、『大日本史』となっている。『大日本史』は、神功皇后を后妃伝に入れ、大友皇子を皇

位に加え、南朝を正統とした三つの特徴を踏まえた史書で『大日本史』編纂の過程で水戸学が生まれてきたといつてもよい。従って、教倫館で学んだ生徒の中には鶯谷から尊攘思想の影響を強く受けた者がいたと考えられる。

この第一条の「尊攘」という語の背景には、幕末期「尊皇攘夷」を掲げて徳川幕府や幕府の国内政策、さらに対外政策を批判した政治運動がある。尊皇論も攘夷論も本来は封建的な名分思想で、前者は身分制の頂点にある天皇を崇拜する思想であり、後者は他国を夷狄として排撃する思想である。従って内に対する尊王論と外に対する攘夷論は結びつかない概念である。それが特に結ばれて出てくるのは幕末のこの時期であり、文久三（一八六三）年五月には下関で外国船砲撃事件、七月には薩英戦争、八月には天皇による攘夷祈願の行幸の予定となるものの、八月十八日の政変で事態が一変し、公武合体派が尊皇攘夷派を一掃するという歴史的事件がおこっている。翌元治元（一八六四）年三月には水戸で天狗党の乱も起きている。文久三年九月に出された「学規」の第一条はこうした当時の政治的状况に対して鶯谷が教倫館の教育のあるべき姿を提示した重要な一条と考えることができるのではないだろうか。

## おわりに

教倫館について奥原氏は、昭和四十八（一九七三）年当時の状況を書き残している。

敷地をみる外には何も残っていない。かつては教倫館の長屋門とその教室の棟が、関宿久世尋常高等小学校の教室として大正六年まで残っていたが、同校改築に際して取り壊されて、一片の残材すら残っていない。

と述懐しており、また、教倫館備え付けの大太鼓が関宿小学校に保

管されていたことも記している。

また、関宿小の外周に低い石垣があるが、これも教倫館時代のものであるという御話を林保氏より伺っている。

本稿では、関宿にあつた藩校の教倫館について、教倫館の儒官だつた亀田綾瀬や鷺谷を通してその学風について、若干の考察を加えてみた。関宿藩の幕末における藩政の混乱には少なからず教倫館の影響があつたものと考えられる。

最後に、芳野金陵について述べておきたい。金陵は、名を世育、通称は愿三郎、下総葛飾郡松崎村の出身で、享和二（一八〇二）年十二月二十日生まれ。文政六年江戸に遊学し、鵬齋に就いたが、すでに老するにより、子綾瀬に学ぶ。文政九年に二十五歳にして浅草福井町に居を構えて生徒に教授した。弘化四（一八四七）年に駿河田中藩に出仕し、一五人扶持を受ける。田中藩の内政改革にあたり、見るべき成果を挙げて、また藩校日知館を興した。その後、文久二（一八六二）年に幕府に抜擢されて、昌平黌の儒官となつた人物である。寛政異学の禁でたたかれた折衷学派亀田鵬齋の孫弟子にあたる金陵が昌平黌の儒官になつたことに鵬齋は草葉の陰から笑つていたことであろう。また金陵は安井息軒、藤田東湖、藤森弘庵などと交友があり、少なからず下総の尊王攘夷派に影響を与えたものと考えられる。そのことの詳細については今後の課題としたい。金陵は、昌平黌の儒官の職を免ぜられた後、大塚（東京都）の地に私塾を開き、子弟の教育や著述にあたり、七十七歳で没している。

### 〔註〕

- (1) 石川松太郎「藩校」（『国史大辞典』）、石川松太郎「藩校と寺子屋」（一九七八年、教育社）
- (2) 下総国には、温故堂（佐倉藩）、成徳書院（佐倉藩）、秉彝館（結城藩）、盈科館（古河藩）、学問所（多古藩）、郁文館（生実藩）、

学習館（高岡藩）、（名称不明）（小見川藩）と関宿藩の教倫館の九校があつたとされている。（『藩校・私塾・寺子屋―房総近世教育史―』（千葉県立総南博物館展示図録、一九九七年）、石川松太郎「藩校」（『国史大辞典』）所収の「藩学一覽」参照。

- (3) 関山邦宏『日本教育史資料収載の私塾・寺子屋表をめぐる若干の覚書き』（一九八九年、日本教育史資料研究会）、石田年子「石造物が教える利根川中流域の寺子屋師匠達」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第七号、二〇〇三年）、川崎喜久男「筆子塚研究」（一九九二年、多賀出版）、松丸明弘「近世民衆教育運動の成立と展開―流山における手習塾（寺子屋）の探索の方法論とともに―」（『流山市史研究』一五号、一九九八年）などを参照。

- (4) 大熊孝『利根川治水の変遷と水害』（一九八一年、東京大学出版会）を参照。

- (5) 奥原謹爾「関宿雜記」（謄写版、一九三〇年頃）。奥原謹爾氏が、自筆によりまとめた冊子で、境市教育委員会町史編纂室長の中村正巳氏がその一冊を所蔵している。おそらく、のちの奥原謹爾『関宿志』の底本になつたものである。

- (6) 奥原謹爾『関宿志』（一九七三年、関宿町）

- (7) 林保氏が「関宿藩校 教倫館」と題して自筆によりまとめた冊子である。

- (8) 奥原謹爾と林保氏は、関宿町に居を構えて、長くこの地域の歴史と風土に精通されてきたことから、両氏のみが持つ地域の情報が著作には含まれている。

- (9) 『日本教育史資料』（一九六九年、臨川書店）。文部省が編纂し、初版は明治二十三（一八九〇）年に出版されたものである。日本教育史研究では現在も第一級の基本資料である。

- (10) 『千葉県教育史』第一巻（一九三六年、千葉県教育会）
- (11) 川村優「関宿藩」（『国史大辞典』）、木村礎編『藩史大辞典』

- 第二巻 関東編』(一九八九年、雄山閣)、『関宿藩年譜』(一九九〇年、関宿町教育委員会)などを参照。
- (12) 『千葉県教育史』第一巻、奥原謹爾『関宿志』などを参照。
- (13) 奥原謹爾『関宿志』、同『関宿雜記』を参照。
- (14) 石川松太郎『藩校』(『国史大辞典』)、笠井助治『近世藩校の総合的研究』(一九六〇年、吉川弘文館)、石川謙『日本学校史の研究』(一九七六年、日本図書センター)などを参照。
- (15) 『日本教育史資料』第一巻、三三九〜三四〇頁。前掲、『千葉県教育史』第一巻、三二八頁。
- (16) 『千葉県教育史』第一巻、三三八頁。
- (17) 『日本人名大事典(新撰大人名辞典)』(一九三七年、平凡社)、『大日本人名辞書』(二八八五年、大日本人名辞書刊行会)、『明治維新人名辞典』(吉川弘文館、一九八一年)などを参照。
- (18) 亀田鵬齋、山本北山、市川鶴鳴、冢田大峯、豊島豊州の五人のこと。
- (19) 梅谷文夫『亀田鵬齋』(『国史大辞典』)、杉村英治『亀田鵬齋』(『特集千住の酒合戦と江戸の文人展』一九八七年、足立区立郷土博物館)、『江戸の文人交友録―亀田鵬齋とその仲間たち―』(一九九八年、世田谷区立郷土資料館)などを参照。
- (20) 前掲、『特集 千住の酒合戦と江戸の文人展』の七頁と三六頁に肖像画がある。同じものではない。
- (21) 小島茂男『幕末維新の関宿藩』(一九七七年、『順天堂大学文学部紀要』二〇号)、奥原謹爾『関宿志』などを参照。
- (22) これらの規則類については『関宿雜記』に全文が記されており、『関宿志』にはその抜粋が掲載されている。奥原謹爾はその出典を『日本教育史資料』と『千葉県教育史』と記している。規則類の原典は『日本教育史資料』第一巻(一九六九年、臨川書店)を用いた。
- (23) 日付には「辛未五月」とあり、「辛未」の年として、一八七二(明治四)年とした。
- (24) 『規制』(文政七年十一月布達)
- (25) 奥原謹爾『関宿志』。
- (26) 林保氏『関宿藩校 教倫館』。
- (27) 『千葉県教育史』第一巻、ここには「武術は兵学、槍術、剣術、柔術、弓術、砲術、及び馬術、遊泳術の八科に細分されていた。」と記されている。
- (28) 『教則』(明治四年五月布達)
- (29) 一卷一八章からなり、孔子が門人の曾子を相手とし孝が徳(人間の本性)のもとであり、教えによって生じることを説いた書。編者、成立年代とも不明。
- (30) 『大学』『中庸』『論語』『孟子』など、朱子学において教学の基本的なテキストと見なされた四種の書のこと。『大学』と『中庸』はもと『礼記』の中の一編に過ぎなかったが、南宋の朱熹(朱子)が学問の目標と人間の本性とを論じた優れた文章であると評価し、『論語』『孟子』と合わせて校定し、注を添えて刊行したが、これが『四書章句集注』で「四書」という呼び方はここに由来する。
- (31) 孔子など中国聖賢の述作した書を経書というが、このうち中核となる五種の書のこと。『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』の五種。前漢の武帝のとき、これらを「五経」とした。宋代には『大学』『中庸』『論語』『孟子』を合わせて「四書」というようになり、「四書五経」と並び称され、儒家の教典を意味するようになった。
- (32) 『春秋』本文に対して左丘明が、さらに詳しい事件の動きや、人物の言行を付け加えたもの。現行の形に整理されたのは、前漢末以降となる。文章表現がすばらしいために、散文の古典として尊重された。
- (33) 中国の史書。魯の太史左丘明の著と伝えられる。春秋時代の八方国の歴史を国別に記したもの。
- (34) 近世後期の歴史書。神武天皇から後陽成天皇までを漢文編年



体で述べたもの。頼山陽の著。頼山陽は幕末維新期の志士に影響を与えた人物。

(35) 中国正史の第一。前漢の司馬遷の撰。一三〇巻。紀伝体の史書で、伝説上の黄帝の時代から前漢武帝までを叙述している。漢書と後漢書のことと考えられる。漢書も後漢書は中国正史の一つで、漢書は班固、後漢書は范曄の撰(一部)。紀伝体。日本では史記、漢書、後漢書を三史として紀伝道の教科書となっている。

(37) 近世後期の歴史書。岩垣松苗著。文政九(一八二六)年刊行。神代から天正十六(一五八八)年の後陽成天皇の聚楽第行幸まで、編年体による歴史を漢文で述べたもの。

(38) 中国の史書。元の曾先之撰。太古から宋代に至る歴史を『史記』以下一七の正史と宋関係の史料によって記述したもの。編年体。

(39) 孟子が諸侯や門人・来訪者たちとかわした議論や対話を門弟たちが整理した書。宋学がおこつてのち、孟子の性善良知の論が儒家思想の主流であると認められ、四書のひとつとなる。ただし、不徳の君主は討つべきだという孟子の主張は体制に反するものとして危険視された。逆に王陽明のような心性自由をめざす学派は個人の自覚を促す孟子の説を大いに支持した。本書は吉田松陰らの幕末の志士を鼓舞する心の糧となっている。

(40) 頼山陽の著。源平両氏から徳川氏に至る経過を漢文体で記述した歴史書。人物中心の武家興亡史であるが、名文で知られ、儒教的名分論に立つ独自の尊皇思想により幕末期によく読まれた。

(41) 春秋時代末期に成立したといわれる。孔子とその門人、および門人たちがどうしの対話をまとめた書。「論」とは順序よく整理されたことば。「語」とは対話という意味。

(42) 水戸藩主水戸光圀の命令で、一六五七(明暦三)年に編纂に

着手された歴史書。編纂の史局は彰考館。漢文の紀伝体。

(43) 『詩経』のこと。中国最古の詩集。西周から東周にかけての歌謡約三〇〇編を収める。春秋時代には士人の必読の教養書となり、『論語』『孟子』『墨子』などにも多く引用されている。

(44) 『書経』のこと。西周時代から戦国時代まで書き継がれた中国最古の歴史書。王の誓いや訓告の言葉が大部分を占めている。五経のひとつ。

(45) 「教則」(明治四年五月布達)

(46) 宋学。「濂洛」とは、濂溪(湖南省を流れる川)にいた周敦頤、洛陽にいた程顥、程頤のことで宋学の大家。朱熹などを加え、「宋学の五子」と呼ぶ。

(47) 「学規」(文久三年九月布達)

(48) 江戸幕府編集による漢文編年体の史書。林羅山・林鷺峰により著される。中国の歴史書の「資治通鑑」を模範として史実をありのまま記すことに努めており、儒教的な合理主義の影響が強いとされている。

(49) 奥原謹爾『関宿志』。

(50) 『日本人名大事典(新撰大人名辞典)』(一九三七年、平凡社)、『大日本人名辞書』(一八八五年、大日本人名辞書刊行会)、『明治維新人名辞典』(一九八一年、吉川弘文館)などを参照。

(まつまる・あきひろ 当館客員研究員)

〔追記〕

平成二年度「千葉県歴史資料調査報告書」の五一頁に「藩校(教倫館)の教科書十冊」を関宿町教育委員会が所有している旨が記されてあった。今から十五年近く前の記載であるが、これらをぜひみたいと思ひ、関宿町教育委員会に問い合わせたが、不明であった。関宿町は野田市と合併したので、野田市が保存しているかもしれないと考え、野田市史編纂室に問い合わせ探していただいたりもしたが、これも不明であった。あれこれ探したが行方知れずになっていた。つい最近これら書籍が関宿城博物館に保存されていることがわかり、同館学芸員の小林氏より写真を送っていただき見る機会を得た。

函入りの十冊で、すべての書籍に「教倫館圖書記」との朱印が捺されている。「教倫館」という文字がなによりもこの藩校の実在を物語っている。函には墨で「久世学校」と記されてもあり興味深い。教倫館の史料がまったくなくだけに大変貴重である。書籍の内容その他については後日に期したい。ここでは、これら書籍の写真を紹介したい。

